

「ドイツ語発音指導への提案」

第1部「解説編」 新倉真矢子

・ドイツ語学習者が発話意図を正確に伝え、相手の伝達内容を理解してコミュニケーションを円滑に行うためには、いわゆる外国語訛りのない「正しい」ドイツ語発音の習得が不可欠である。正しいドイツ語発音は、話者個人に関するマイナスの情報が(外国語訛りなどパラ言語情報)伝わることを避けられると同時に、正しく発音できれば聞き取りもたやすくなるなど、聞き取りとの関係に影響を与える。本発表では、日本人が発音上困難であると予想される箇所を、音素レベルと超分節素レベルに分けて説明した。音素レベルでは 1) 文字と音の関係（文字の正しい読み方）、2) ドイツ語特有の音（ö, ü, r など）、3) 日独両方に存在するが調音上注意を要する音素に分類して説明した。3) では、日本語の「エ」音に相当するドイツ語音には3種類（[e][ɛ][ə]）あること、語末の[n]の[N]への代替、ドイツ語摩擦音[z]の調音法などが含まれる。超分節素レベルでは、アクセント位置と音響パラメータの関係、上昇調の文末メロディーについて、音節構造の違いによる影響を説明した。

・発話中の音は隣接する音の影響を受けて同化したり、音そのものが脱落する。音脱落が起こる環境は予測できるため、発音や聞き取りの際にはその規則性をあらかじめ知ることが重要である。音レベルでの正しい読み方や調音の仕方をマスターした段階でこのようなレベルを目指すことが大切であろう。

シュワー音脱落は、発音辞典や研究者により扱いが異なり、シュワー音直前の子音（K）に依存する：K+<en>。Duden 発音辞典(2005)では、Kが阻害音（破裂音、摩擦音、破擦音）であればシュワー音は省かれ、/n/は音節主音的子音/n/となるが、母音、鼻音、側音、震え音、[j]音直後では/ə/は残るとする。Ramers & Vater (1992: Einführung in die Phonologie, Hürth-Efferen) では、阻害音の直後は成節化されるが、それ以外はシュワー音が削除された/n/のみになるとする。シュワー音は全ての語尾で削除され、/n/になるとするのはKohler(1990:Segmental reduction in connected speech in German: Phonological facts and phonetic explanations. In Hardcastle, William J. & Marchal, Alain (Hsg.): *Speech Production and Speech Modelling*, NATO ASI Series, Vol 55: 66-92.)である。

発表者は上智大学でドイツ語の学習者15人ずつを初級者グループ、中級者グループに分け、5人のドイツ人母語話者の音声を比較・分析した。その結果、ドイツ人話者では77%でシュワー音保持が見られたが、中級者では16%、初級者は0%という結果となり、初級者が全くシュワー音を省略せずに発音すること、また聞き取りの際にも脱落形が困難を招いていることを報告した。また、ドイツ語発音の規範とされるドイツのニュース番組（Tagesschau）ではどのような個所で脱落が起きているか（シュワー音や子音連続中の/n音など）を文献との関係で説明した。

第2部「実践編」 正木晶子

実践編では、実際に授業の場面でどのような音声指導が考えられるか、発表者の経験も踏まえて具体的に紹介すると共に、参加者にも実際に発音して頂くことで、より良い音声指導方法を考えた。今回は時間の関係上、分節音の指導方法に絞って紹介した。

特に扱ったのは、前半の「解説編」を踏まえた上で、①ドイツ語の Umlaut の発音指導、②

日本語で「エ」(e)とされる音がドイツ語には主に3種類 ([e][ɛ][ə]) あるが、日本語の[e]

と比べた場合の調音点の違い、③日本語話者に特に難しいとされる[r]と[l]の発音指導例、④[b]-[w]の調音点の違い、⑤綴り字 ch の音声的な実現のされ方、⑥声門閉鎖音について等である。調音位置(調音点)に関しては、音声学の分野で世界共通に参照されている国際音声字母(IPA)や、口腔内の断面図を使用して説明した。更に、学習者同士で楽しみながら発音及び聞き取り練習が行えるように、パートナーで会話する形式の音声練習例も紹介した。

「自分で調音することが出来ない音は、聞き取ることが困難である」という観点から、参加者には内省的に個々の音の調音点を確認して頂いた上で、日本語にない音の聞き分けができるかという聞き取り練習も随時織り交ぜながら、発音練習を聞き取り練習に繋げていく重要性についても説明した。

また、ビデオ教材である *Phonetik Simsalabim* (1998 Langescheidt) や、聞き取り練習を主に扱った *Phonetik aktuell* (2005 Hueber) をはじめ、音声学的な視点からドイツ語の音声練習を扱った教材を紹介した。特に *Phonetik Simsalabim* では登場人物の口元がメイクで強調されており、ネイティブのいない授業の場合には、口や唇の動きを視覚的に理解するのに適している。

実際の教育現場では、ドイツ語を専門にしている学科であっても、音声練習のためだけに特別に設置された授業が、半年もしくは年間を通じて存在することは稀である。音声練習は、初回の授業あるいはドイツ語に慣れてきた段階の1~2回の授業で集中的に扱うことも可能ではあるが、出来れば通常の授業時間内に短時間であっても定期的に取り入れ、学習者に発音を意識させることが重要であると考えられる。